説教20211024イザヤ59：9-19マルコ10：46-52「わたしを憐れんでください」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

前の牧師、齋藤マイク先生は、よく「教会とは神様の愛が降り注いでいる所」とおっしゃっていました。それはその通りで、またそれと同時に、私たちは、教会で神様に対して愛を捧げてもいるのです。ただ、私たちが捧げる愛は、時には萎えて来たり、あるいは愛することをやめてしまうこともあるような不完全なものであります。しかし、そんな私たちの愛には比べ物にならないほど、神様の愛は常に、四六時中、豊かに私たちに降り注いでいる完璧なものです。それはとめどなくあふれ出る豊かな泉の湧出のようであります。たとえ私たちが神様を愛することに疲れたとしても、その神様からのとめどない愛の泉の水を口にすることによって、また、私たちは愛する者へと変えられていくのです。

そして今日は、神様が私たちを愛されている、と言うことを、神様が私たちに仕えていて下さるというように言い換えてみたいと思います。先週の説教題は「仕えられるためではなく仕えるために」でしたが、その通り、教会において、イエス様は、私たちに対して「仕えるために」居られるのです。「でも先週イエス様は、私たちにも『仕えられるためではなく仕えるために』ということを行うよう勧められた気がしますが、」という声が聞こえてきそうですが、この仕えられることと仕えることは、教会において両立しています。ただし、イエス様が私たちにお仕えしてくださることの方が、先ず最初にあり、そのことによってこそ教会は支えられているのです。

例えば、私たちは教会でイエス様に様々な形でお仕えしています。例えばオルガンを弾いたり、礼拝の司式をしたり、説教をしたり、あるいは、みんなのためにコーヒーをいれたりと、それらすべての奉仕は、かけがえのない神に対してお仕えすることですが、残念なことに人間だれしも不完全であり、時には奉仕することに疲れたり、嫌になったり、また怒りを感じることすらあるかもしれません。それでも尚、私が、教会に居続けて、繋ぎ止められているのは、イエス様のほうが私に仕え続けていてくれるからに他なりません。いうまでもなく、イエス様は、私の方がお仕えするのをやめたから、彼は私にお仕えするのをやめてしまうといった、この世的人間的なお方ではありません。私が、イエス様の前で倦み疲れて何もする気も起きず、ただうなだれて居ると言った時でも、その私に対して仕えて下さることを決してやめることがないお方であります。このように言いますと、イエス様は、母性愛溢れるお母さんに比べられるかもしれませんが、実は、イエス様がこの私に仕えて下さる熱意は、お母さんの比ではありません。イエス様は、私に対し、この世の死をも乗り越えて、最後の神の国に至るまで、一時も目を離すことなく仕えていて下さるのです。このように見ていきますと、イエス様が私たちに仕えていて下さることは、神の業であり、その一つ一つは奇跡であります。ただ、私たちは、四六時中、歩みの一歩一歩をイエス様に守られているゆえに、かえって、そのことに気が付かないでいるのではないでしょうか。

今日私に、嫌なことが沢山起こり、気分も滅入り、もう世の中が嫌になって生きていたくない、という日が訪れても、その渦中にいる私を根本的に憐れんで慰めてくれるのは、お母さんでも、テレビでも、大自然の美しい景色でも、美味しい食べ物でもありません。これらのことも全く意味がないわけではないですけれども、根本的なことではなく、それら自体は有限でその効果は限界あることであります。そしてそんな嫌な日にこの私がイエス様に出会って憐れまれて慰めてもらえることは、一つの奇跡であります。奇跡と言っても、めったに起こらないという意味ではなく、私たちはイエス様に対して心を開くときには、いつでもどこででも、イエス様から奇跡を頂き、新たな命を頂き、イエス様に仕えてもらえるのであります。このように見ていきますと、今日の聖書箇所に出てくるバルティマイがイエス様から目が見えるようにされた姿は、私たち一人一人の姿に重なってくることでしょう。私たちは、絶体絶命の状況に差し掛かった時、常に、イエス様に憐みを求め、そうして新たな命を与えられて、その命を継続させるように造られているのです。今日の説教の最初の言葉遣いに戻れば、私たちが、根本的にイエスさまにお仕えする姿と言うのは、実は、イエス様にすがりつき、身をゆだねて、憐みを乞うことだといってもよいでしょう。ある神学者の言葉を借りれば、それは、人間の神に対する絶対依存と言うことですが、このように、私がイエス様に依存して生きるということが、実はイエス様にお仕えしていくことなのです。

ところで、私たち人間は、人に依存して生きていくことはできません。それは現代社会を見渡せば明らかで、人に対する依存が度を越してしまうと、さまざまな病的な事象が起こってくることはもはやだれの目にも明らかでありましょう。しかしここに唯一例外であるお方がおられるのです。それがイエス様です。私たちは、何時でもどこでもイエス様にひたすら依存しまくってよいのです。私たちは人生に絶望したとき、イエス様に向かってお祈りし、憐みを求めイエス様の声を聴かされて、私たちは、また新たに生かされるのです。

さて今日の聖書箇所では、イエス様に憐みを求め、依存しているバルティマイの姿を見て、気に食わなく思った多くの人々が出てまいります。この多くの人々の行いや発言はとても興味深いですので見てまいりましょう。まず、人々はバルティマイを𠮟りつけて黙らせようとします。おそらく、この人々は、バルティマイがイエス様に対して間違ったことをしていると感じたのでしょう。なぜそのように感じたかと言うと、この人々はイエス様から「仕えられるためではなく仕えるために」生きなさいと、勧められていたからです。この人々から見ればバルティマイはどう見てもイエス様にお仕えしているとは見えなかったのです。このことはこの世の常識に照らせば、一見当たり前の見解であるかもしれません。道端に座り込んで、やってきたイエス様にただひたすら「ダビデの子よ、私を憐れんで下さい」と叫び続ける者が、イエス様に仕える者であるわけがなく、イエス様に仕えられるものでもないと言った感傷が人々を支配した事でしょう。そして、バルティマイの行いの非をとがめる私たちこそ、まことにイエス様にお仕えしているのだというような矜持がこの人々の間には漂っているようであります。

事実、この人々は誠に人間的に忠誠を込めてイエス様にお仕えをしています。49節でイエス様から、「あの男を呼んできなさい」と言われるや、人々は、手のひらを返したように、バルティマイに「安心しなさい、立ちなさい、お呼びだ」といって、彼をイエス様に近づけるのです。この人々は何という忠実なイエス様の部下なのでしょうか。まさに、命を賭けてイエス様にお仕えしようとする人々の姿がそこにはあります。イエス様の御言葉には何が何でも従って、その通りにして、お仕えしようとする姿です。私たちは、この人々のこういった行いを一概に否定することはできないでしょう。イエス様に従順であることは良いことであるからです。ただし、この人々には的外れ、すなわち罪な行いがあるのも又事実です。この人々は初めはバルティマイがイエス様に近づくの妨げようとしましたが、これはしてはならない罪な行いでありましょう。しかし人々は、その罪に気が付いていませんでした。人々は全く自分たちが、イエス様に対してもバルティマイに対しても正しいことを行っていると思い込んでいたのです。

私たちは、このように知らないうちに、自覚のないうちに罪を犯してしまう愚かな者たちであり、これもまた他人事として片付けられない私たち自身の問題であります。今日のイザヤ書の聖書箇所を見れば、９節に「それゆえ、正義はわたしたちを遠く離れ／恵みの業はわたしたちに追いつかない。わたしたちは光を望んだが、見よ、闇に閉ざされ／輝きを望んだが、暗黒の中を歩いている。」とありますが、このように私たちが知らずに犯している罪のゆえに、正義は、そして光は私たちを遠く離れ去っていくのです。

バルティマイをとがめだてしたこの人々は、自分たちこそ誠の仕え人だと思っていたけれども、実はそうではなかったのです。むしろ、バルティマイこそ、まことにイエス様に仕える者だったのです。では、なぜこの人々はこんな悲しむべき状況にあったのでしょうか。それは、イエス様の十字架の死と復活を知らなかったからでしょう。この人々は確かにイエス様に従順であり、御言葉を忠実に守りその通り実行する者たちでありましたが、そのようにイエス様にお仕えして、わが身が何かを得たいと思っていたのではないでしょうか。このようにイエス様にお仕えしていくことによって、わが身はより清められ立派になって神の御前に非の打ちどころのない物とされるだろうと期待しながら、日々、イエス様にお仕えしていたのではないでしょうか。そこにはあくまでも自分中心の眼差しがあります。この仕方は、やがて行き詰ってしまうことが予想されることでしょう。なぜならば、このような自分の努力によるお仕えは、やがて不完全な人間の業として、打ち捨てられ放棄されてしまうからです。ましてや、このような自分の努力によるお仕えによって、死が乗り越えられると考えるにはとても無理があることでしょう。

一方、バルティマイの方は、ただひたすら、神様中心の眼差しにその身をゆだね、イエス様にその身をさらして、イエス様にただ憐みを乞うているだけです。そこに自分の意図とか工夫とかは無いのです。そのようにしてイエス様に憐みを求めたので、その結果、目が見えるようになるという奇跡が与えられたのです。

私たちは、自分中心の眼差しに取りつかれるとき、実はイエス様を見られなくなり、神様中心の眼差しにその身をゆだねられなくなります。

たとえ燦燦といつも神さまの愛が降り注いでいる教会にいたとしても、神様を見ないで自分自身を見ていては、新たな命を頂いていくことはできません。

イエス様ご自身、父なる神にお仕えする時に、自分が父なる神に対して役立っていこうなどとは思わずに、ただ、自分の意志を、父なる神の御心に委ねられたのです。このお仕えするということの基本に立ち返って、私たちも、最後の時まで、イエス様にわが身を委ね、憐みを求め続けてまいりたいと願います。

お祈りいたします

天にいます

私たちは、バルティマイのようにただあなたにすがりつく信仰を持ちたいと願いますが、都合によって自分自身の考えや計画に支配され、あなたの御心を見失ってしまう愚かな者です。どうか私たちがどこにいましても、あなたの眼差しに照らされ、あなたにひたすら仕える者とならしめて下さい。

　あなたは変わることが無い憐みを持って、私たち被造物を、最後の永遠の喜びのときへと導いていてくださいます。私たちはこの世の移ろいに翻弄されることなく、どんな時もあなたの眼差しを見失うことがないように私たちを整えて下さい。

　召天者記念礼拝が近づいてきました。どうか多くの方々と、作り主であるあなたをほめたたえることが出来ますように。あなたの御心が私たちの口を通してあちこちに告げ知らせていきますように。

　多くの苦しみがあるこの世の私たちの歩みを励まし導いてくださるのは、憐み深いあなたをおいて他にはありません。どうか私たちが偶像にそれることなく、あなたを見つめて一歩一歩を歩んでいくことが出来ますように

父と聖霊と共に